

經濟論叢

第七十卷 第六號

金融論特集

- 預金通貨と流動性及び利子 …… 中谷 實 (1)
- リカード貨幣信用論の一考察 …… 小野一一郎 (23)
- 價值及び價值形態の一考察 …… 三上正之 (47)
-

(昭和二十七年十二月)

京都大學經濟學會

リカード貨幣信用論の一考察

——その近代的展開への展望を含めて——

小野 一 郎

序 論

- 一、リカードにおける資本視角と貨幣視角
 - (i) その資本視角と貨幣の位置
 - (ii) 貨幣視角
- 二、資本視角・貨幣視角相互規定性の展開
 - (i) 利子
 - (ii) 信用及び信用制度
 - (iii) 爲替相場
- 三、通貨原理とその主体性
 - (i) 歴史的背景
 - (ii) 通貨原理の主張
 - (iii) その主体性（階級性）
- 四、展望と結び
 - (i) 理論史的展望
 - (ii) 結び

序 論

マーカンテイリズム批判の体系として生れた古典學派の体系は、勃興期における産業資本の騎士として優れて生産的な性格をもつて、その祖國イギリスはもとより全資本主義諸國に科擧としての正當性を長期に亘つて保持した、

けれども貨幣信用論の領域においては既に早く古典派理論への熾烈なる批判が「銀行學派」によつてなされた。だが銀行學派によつて完膚なきまでに論駁された通貨學派||古典學派の貨幣信用論の体系は死滅せず、それはそれ以後の實踐的課題としての政策論が提起される毎にあらたな粉飾をもつて蘇つた。例えば第一次大戰後におけるケインズ||ロビンソン論争、續く恐慌をめぐるケインズ||ハイエク論争において、絶えず再現する安定通貨論||健全通貨論者の底には、通貨學派の魂が宿つている。貨幣數量説の批判者としてのハイエクに通貨學派と同じ意見が提起され、又「すべての恐慌理論は常に尙通貨學説の思想から遠ざからんとするのではあるが、しかも絶えず通貨學派の軌道へ戻つてくる。吾々もいくたびか最近通貨學派の見解を確證するが如く思われる觀察へと導かれる。」とミーズが云つているのは何故であろうか、それは今尙通貨學派がその存在理由をもつ事實が現實の中に存在しているからなのである。しかし、それは論理的に説明されねばならない。これまでの通貨學派批判乃至その基礎たるリカード批判は單にその貨幣論のもつ矛盾、即ち金屬主義學説（素材價值學説）と數量説（交換手段學説||名目主義學説）の矛盾、いわば貨幣本質觀の混乱と、貨幣機能觀における一面化の指摘に終始し、いわば價值論の平面において問題を處理してきた。だが通貨學派||古典學派の優れて構造的な体系は單に價値の平面においてでなく、そのもつ資本理論のうちにもあり、しかもその場合貨幣||資本理論が一面的に把握され体系化されている所にある。むしろそのもつ資本理論が貨幣理論を導出したとも考えられる。それは矛盾の体系ではない。

今日の支配的な貨幣理論は殆どすべて名目主義の上に立脚しており、それが通貨學派||古典學派批判の上に多く立脚しつつもその中に通貨學派と同一の理論構造をもつものがあることの論理的把握はこの視角から再考されねば

ならない。それによつて前記せる通貨學派の存在理由を把握しうるし、一方同じく名目主義に立脚しつつそれが通貨學派—古典學派と異なる資本理論と結合することによつて異なる体系をもつことの論理的解明への視角が與えられるのである。更に又同一の理論構造をもつにも拘らず、それが現實にいかなる階級の代言者としての自己を確立するかは單にそれがもつ價值論(貨幣論)—資本理論そのものからは論理的に立證しえぬこともまた認識さるべきである。地金論争における地金主義者と非地金主義者の對立。通貨主義銀行主義論争における通貨學派と銀行學派の對立。安定通貨論争における安定通貨論—中立貨幣論と管理通貨論との對立。更に戦後日本におけるインフレ收束をめぐる安定通貨論と中間安定論の對立等々は論理構造における二つの系譜に要約しうるが、その場合、通貨學派乃至それと同じ系譜の論者の主体性は夫々異なるからに他ならない。もとより以下の小論において上記せる總ての課題に答えることは不可能であらう。ここでは通貨學派の体系的土台たるリカードの資本視角に焦点をおき、ここからリカード貨幣論へのあらたな分析視角を提出し、ここから利子・信用・爲替相場に到る一貫せる謬見を追跡し、そのもつ政策的歸結—通貨原理(古典派的均衡メカニズム)を解明すると共にその主体性(—階級性)を把握し、最後に近代的粉飾をもつて現れている通貨學派—古典學派への分析視角を提供し、上記せる諸課題への些かの解答を與えようとする。何故リカードをとり上げるか、それはリカードの理論こそ古典學派—通貨學派の樞軸をなす体系を、資本理論を含めて最も体系的に精化した構造をもつが故である。

一 リカードにおける資本視角と貨幣視角

資本は衆知の如くその循環過程において、三つの異なる形態を通過する。貨幣資本・生産資本・商品資本なる形

態が何れも同一資本の變態として次々にその經過的な姿態において繼續的循環において現われる。資本はかかる變態過程そのもの内に自立化しつつ價值増殖をなすものに他ならない。この三つの形態の内、最初の形態と最後の形態とは流通の段階であり、第二の形態は生産の段階、價值増殖の段階に他ならず、この形態においてのみ資本が眞に資本として現われるのである。資本はかく三形態の循環として現出するが、(註I) 同時にまた資本の循環は資本のこれらの夫々の機能形態(三形態)の同時的並列的運動、諸形態の再生産と見ることが出来る。資本の循環即ち $G \rightarrow W \rightarrow P \rightarrow G$ なる一級公式は $G \rightarrow G$ というその出發点と終局点とを固定した運動、循環ではなく夫々の機能形態の循環を内包する運動となる。即ち G から始まる $G \rightarrow W \rightarrow P \rightarrow G$ なる循環は同時に P から始まる $P \rightarrow W \rightarrow G \rightarrow P$ なる生産資本の循環と、 W から始まる商品資本の循環 $W \rightarrow G \rightarrow P \rightarrow W$ の循環を内包する。 G から始まる運動のみをもつて資本の運動とはなし得ない。それはただ貨幣資本の運動として存在するに留まる。それが資本の一般的公式として擧げられるのはそれが資本運動の起動動機たる價值増殖を端的に表現するからである。かくして資本の全運動はその個々の形態の不斷的、間斷なき再生産によつて、この三循環形式の連續、統一として現われる。この循環形式の一形態において資本運動を把握することは、三循環形式の連續として現われる資本の循環運動の一つの形態に排他的に孤立化し理解することになる。もとより三循環形式の夫々は夫々資本の一面的把握においてその特質をもつ。即ち貨幣資本の循環は資本制生産の起動動機を、生産資本の循環はその一般的基礎を、商品資本の循環はその順當な進行の條件を表示し、夫々を特質づけ。けだし $G \rightarrow G$ の循環は $P \rightarrow P$ の循環を基礎として初めて遂行され、 $P \rightarrow P$ の循環は $W \rightarrow W$ の循環を條件として繼續的に遂行されるからに他ならぬ。(註2) けれどもこの形態(形式)の一をもつて資本全般の理解にかえることは誤謬である。貨幣

資本の循環をもつて排他的に孤立化し、資本の運動としたマーカシテリズム批判の体系としての古典學派はこの生産資本の循環をもつて排他的に資本運動を孤立化し把握した所にその特質をもつ。(註3) しかればかかる生産資本循環の形態の排他的孤立化は如何なる理解に認識の体系を結果するか、以下リカードの資本形態視角をとり上げその孤立化一面化の論理的歸結を追うことにする。

註1 資本がかがる形態規定をもつこと自体これは根本的には價值形態論にその理論的基礎をもつ。もとよりそれは單純商品流通段階における形態論からの論理的歸結としてでなく、資本の生産關係の上でのみ生ずるものである。註2 マルク

スにおける商品資本循環形式($W-W'$)は、資本制生産の順当な遂行の條件を表わすものとして後に社會的總資本の循環はこの視角からなされることになる。だがマルクスもいえる如くそれは條件分析に留まる。けれど $W-W'$ の循環形式はそれ自らの動力に起動動機をもたないからである。だがマルクス經濟學者においてもこのことを理解せず恐懼をこころから、即ち表式そのものから論證せんとした者は數多く存在する。(ローザ・グロスマン)近代經濟學における動態化の提起が貨幣的視角を重視する論者シュムペーターにおいてなされたことは興味深い。けれど彼の体系こそ $G-G$ の視角に他ならず資本主義の起動動機に推進力の表現をみるからに他ならぬ。又他方同じ貨幣的視角に着目する論者に豫想・選擇等の心理的動機が重視されるに到つた所以は貨幣資本の循環においては出發点そのものがすでに資本家の資本家としての主觀的立場・判斷が必要であり又復歸点から更に次の再生産蓄積に向かう場合もその主觀的判斷・動機を必要とするからに他ならない。だがかかる豫想選擇は再生産行程の諸條件によつて客觀的に規定されるものに他ならぬが、かかる立場からは因果關係が逆立ちして現われてくるのである。近代經濟學における資本視角の混乱と、統一への努力については中山伊知郎「資本の理論」を見よ。

註3 マルクス資本論第2卷第2章參照

(1) 資本視角と貨幣の位置 リカードの資本概念は次の如く定式化されている。彼によれば、「資本は一國の富の中の生産に使用せられる部分であつて労働に効果を與えるに必要な食物・衣服・道具・原料・機械等より成る

ものであり」、(「原理」小泉譯 P. 76 以下すべて譯本の頁數を示す) 而してかかる「資本はその速かに消耗せられて頻繁なる再生産を要するか又徐々に消費せられるかの如何によつて流動資本か固定資本の何れかに分類せられる」(「原理」P. 28) ののである。かく資本を一つの自然形態(現物形態)において把握する時、同時にその價值回轉上の相異から固定・流動資本に二分し、固定化する時如何なる結論が生れるか、勿論リカードは資本の蓄積動機そのものを見る場合、單なる實物的蓄積を目標として行われず利潤を目的とするとのべるが、その場合にも資本はその蓄積を生産的ならしめる目的以外には蓄積を行うものでないことを附言している。(「原理」P. 105) 即ちこの場合利潤の蓄積は單にネタール・システムの如き貨幣形態の蓄積をもつて蓄積とは考えぬのでありこのことはリカードの次の言葉からも窺える。リカードは「貨幣の形においては此の資本は何等の利潤をも生ずるものでないが、それと交換され得べき原料・機械及び食物の形においてはそれは収入を生じ、國家の富と資源とを増大せしめるであらう」。(「原理」P. 224) 「如何なる國民と雖もその價值を貨幣に實現する目的で穀物その他の貨物をつくるのではない」。(「地金の高き價格」小畑譯リカード貨幣銀行論集 P. 103 以下論集と略す) と。この場合貨幣は明らかに單なる交換手段として資本蓄積を媒介するものとして現われている。そして上記の現實資本の蓄積こそが生産物増加、價值増加を齎らすものと説かれている。(「原理」P. 107) このことは上記せる資本に關するリカードの定式化と共に彼が資本形態を生産資本の形態において把握していたことを物語る。かく資本を、資本蓄積を、生産資本―現物形態において把握する時どんな特徴をその体系はもつか。それを明らかにすることによつてリカードの矛盾又彼の貨幣論の必然性を明らかにしうるだろう。(註 4)

古典學派の資本形態論―資本視角を生産資本の循環視角に立つものとして詳細に分析したのはマルクスであるが

以下彼に従いかかる資本視角の特徴と論理の齒車を分析しよう。マルクスは生産資本の循環は $P : W \rightarrow G \cdot G \rightarrow W$: P いう形式とり、この形態にあつては二つの特徴が存在するとしている。二つというのは即ち第一には貨幣資本の循環形態 ($G \rightarrow W : P : W \rightarrow G$) では P (生産資本) の機能たる生産過程は貨幣資本の循環を中断してその媒介者として現われるが生産資本の循環では流通過程が兩極の生産資本形態を中断するものとして現われる。即ち貨幣は單なる循環の媒介物として現われるのであり、第二に總流通はそれが貨幣資本でとるのは反對の形態で現われるのである。即ち貨幣の量的規定を度外視すれば前者、貨幣資本の循環は $G \rightarrow W \rightarrow G$ であるが後者生産資本の場合には $W \rightarrow G \rightarrow W$ ($W \rightarrow G \cdot G \rightarrow W$) でありかくして單純な商品流通の形態 $P : W \rightarrow G \cdot G \rightarrow W : P$ (カッコー小野) となる点である。(資本論長谷部譯5分冊 P. 123) かくて $P : W \rightarrow G \rightarrow W : P$ (カッコー内は流通過程) は資本の形態循環の一形式であるがこの場合資本價値の轉形した姿態である G は W の變態の手段 \rightarrow 媒介物として扱われ、ここでは貨幣の資本としての特質も單なる流通手段としての貨幣の機能に解消されることになる。同時に第二の特徴からも明らかなる如くこの形態にあつては流通は $W \rightarrow G \rightarrow W$ の單純なる商品流通と同じであるために、この形態を排他的に孤立化する場合には生産の資本制的性格は看過され超歴史的な生産過程と見られるに到るのであり、『原理』P. 18) 第一の特徴と相まつて物々交換論 \rightarrow 販路説 \rightarrow 貨幣ヴェール觀に陥ることになる。だからかかる循環形態の排他的孤立化は本来特徴として把握さるべき過程の一面性がそのまま理論として体系化されることとなる。「生産物は常に生産物又は勤勞によつて購買せられるものであつて、貨幣は單に交換を行う媒介者たるに過ぎぬ」(「原理」P. 285) というリカードの言は先述せる彼の諸定式と共に上記せる二つの特徴をそのまま体系化したことを如實に物語っている。ここでは貨幣は單に流通手段 \rightarrow 交換の媒介物として、ヴェールとして、同時に商品交換は物々交換

として把握されている。けれど $W \cdot I \cdot G \cdot W$ をそのままみれば商品と商品の交換となり結局物と物との交換となつてしまふからである。

だが今一つ指摘せねばならぬ点がある。 $P \cdot P$ の循環においても P はそれだけとり出して見れば生産資本は固定資本・流動資本と労働力とに他ならず、生産要素にすぎない。それが資本としてあるのは労働者が自己の生産手段の非所有者として、労働力の販賣者として現われ一方資本家が生産手段の所有者として、商品としての労働力の購買者として現われそれを生産に緊縛することによつてである。換言せば P はこの生産關係の成立と再生産を内包する循環過程において生産資本なのであるが、この循環視角に立つ時はこの價值増殖過程が見失われ、生産要素全体の力が蓄積を生む様に理解する傾向をまぬがれぬのであつてここにリカード價值論の混乱・修正の論理が伏在することになる。かくてここから一步前進すれば、労働の生産力は資本の生産力と見られるに到る危機が内包される。又かかる形態の循環を時間との關係において追求する理論（迂回生産理論）においてリカードと同じ論理視角を見出すことも理解しうるであらう。（後述）以上我々は生産資本循環における貨幣の位置を検出した。ここから導かれるリカードの貨幣論は如何なるものか。

註 4. アダム・スミスにおいては彼の資本視角にも拘らず、貨幣・信用の問題においては基本的にリカードと同じ論理構造をもちつつ、時に彼の資本視角からはみ出る。それは彼がその多くをカンテイオンに負うたからに他ならない。

(ii) リカードの貨幣視角　リカードは貨幣について「金銀も他の一切の貨物と同じく一つに之を生産し、且之を市場に齎すに必要な労働量に比例してのみ價值を有する」（原理 P. 314）とのべている。この場合金銀は明らかに商品＝貨物として、それ自体價值あるものとして取扱われている。ここから貨幣數量は如何に規定されるか、リカ

一ドは、「金屬貨幣を使用するある特定國において諸々の支拂が行われるために貨幣として使用される金屬の分量、または紙幣が部分的、若くは全部的に使用されている場合であるならば紙幣によつて代用される金屬の分量は必ず三つの事項に依存する。即ち第一は金屬の價值に、第二にはなさるべき支拂の額、または價值に、而して第三はそれらの支拂の行われる際の貨幣節約に依存する。」(論集 P. 86) と。かかる場合流通必要量に關する彼の命題は明らかに價值の見地から正しい位置におかれている。ここからは流通する商品の價值が與えられるとこれを流通せしむるに必要な貨幣の總額が與えられることになる筈である。だがリカードはかかる見地を捨て「貨幣の増加又は減少はそれが金貨・銀貨または紙幣のいづれから成つていようと、等しく貨幣の價值を(諸貨物を流通するに必要な量) 以上にもまた以下にも増加または減少せしめることは出来ない」(論集 P. 80) とのべ金・銀・紙幣を同一視し、更に進んでこれらをすべて銀行券と同一視する。彼は「いづれの國においても、鑛山が發見される代りに英蘭銀行の如き流通媒介物たる銀行券を發行する權能を有するところの銀行が創設されて多額の銀行券が商人への貸出または政府への貸上の方法によつて發行せられ、その爲に通貨の額が著しく増加されたとすれば、それは鑛山發見の場合と同じ結果を生ずるのである。即ち流通媒介物の價值は下落し、それに比例して財貨の價值は騰貴するのである。」(論集 P. 36) と。そして前述の正しき命題は忘れられ、一貫して貨幣數量説を展開するのである。

リカードが先ず貨幣金屬—商品説として現われ次いで數量説—名目主義者(註5)として体系化したのは何故か、明らかにそれは商品の論理において排他的に析出される一般の等價形態たる貨幣の意義を同時に貨幣のもつ形態諸規定を把握しえなかつた彼の價值論の誤謬あることは勿論であるが、前記せる彼の資本視角が貨幣を流通手段とし

てのみ把握せしめ、その機能においては貨幣は無價値の表章でも代位しうるが故に、金屬貨幣も兌換銀行券も、不換紙幣も唯購買券としてのみ考えられ、その價値も單なる媒介物として考えられる結果、貨幣は流通の外にはみ出ることとは出來ず、追加信用は W—W に介入する流通手段増加インフレとなり、すべて數量に依存してその價値が騰落するという考察に導かれたからである。貨幣・金の價値尺度機能はもとより、蓄藏貨幣、貨幣機能は無視され、支拂手段としての貨幣機能、それに基く手形流通を土台とする銀行券流通の特異性も亦無視された理由はここに存在する。マルクスはいつて「リカードが證明しようとしたことは、諸商品の價格または金の價値は流通する金の分量に依存することであつた。……この證明は貨幣が流通手段としての機能以外に果たす總ての機能を捨象することから成り立つ」。〔經濟學批判官川譯 P. 50〕と。リカードをしてかかる誤謬をなさしめた歴史的事實を看過すべきではない（後述）がその論理的誤謬は明らかであろう。

貨幣をモノタール・システム及びマーカンテイル・システムが流通の結晶的産物としての形態規定（蓄藏貨幣）において捉え、貨幣と資本とを混同し、唯一の富と規定したのに對し、資本を生産資本形態において把握したことは資本制生産の基礎を明らかにするものとして遙かに一歩進んだ内容をもつものであるが、貨幣は流通手段として定置され、爾後彼の視角展開を規定することとなるのである。

註5 貨幣の價値が數量によつて規定されるならば總じて貨幣の固有の價値は抹殺され、すべてが單なる價値表章に轉化されるから數量説は名目主義者となる。

二 資本視角、貨幣視角相互規定性の展開

(I) 利子 以上で我々はリカードにおける資本視角より導かれる貨幣視角—數量説の論理を明らかにしたが、貨幣は貨幣としての規定、次いで資本としての規定以外に更に高次の範疇段階に移行する。もとよりそれは資本における平均利潤率の形成、即ち一般的に利潤を生むという使用價値の形成と、資本における所有と經營の分離（所有資本家と機能資本家の分離）なる社會關係の上に、貨幣は利子生み資本としての形態規定を獲得する。この場合貨幣（貨幣資本）は利潤を生む資本としての使用價値をもてる特殊なる商品となり、利子はこの資本の價格となるのである。同時に、貨幣は利子生み資本として相對的に独自の流通をとげ、基底としての再生産流通を離れるわけである。ここに現實資本蓄積と貨幣資本蓄積の背離の可能性が存在する。通貨と信用を混同し、不換紙幣と銀行券を同一視し、貨幣をすべて數量説で解決し、流通手段に解消せるリカードにおいて問題はいかに解決されるか、彼は「紙幣の過剰によつて判断すべき標準は金または銀地金の價格ではなくて、利子率であるという説を、即ち紙幣が過剰なる場合には利率は下落（註6）する」という説を主張する人がある。しかし私の考える所を以つてすれば元來利率は貨幣の多少によつて左右されるものではなくて、貨幣を除外した資本部分の多少によつて左右されるものである」。（傍点小野）又「利率は資本の使用から生ずる利潤によつて左右されているのであつて、資本の生産物を流通せしめるために使用される金屬個片の數や質によつて支配されるものではない」。（論集P.78 P.79）とのべている。彼においては利子は現實資本—リカードでは生産資本の運動に直接結びつき、利潤に結合して説明される。（註7）けれどしP:Pの循環を排他的に孤立化し、貨幣形態を單純商品流通における流通手段に一面化する場合には貨幣

はただ流通媒介物として瞬間的に介入する故に貨幣の他の諸規定は勿論、貨幣が貨幣資本・利子生み資本としてより高次の範疇に移行し再生産流通から離れた相對的獨自性(ケインズはかかる利子生み資本固有の流通を金融的流通として産業的流通より分離した)をもつ所以が忘れられ利子率は利潤率を媒介とする現實資本⇨生産資本の多少によつて、資本の需給⇨貯蓄と投資によつてきまる、即ちその運動に規定されるという資金需給説⇨貯蓄投資説をとることによつて利子を現實資本に直接的に結合する結論を導き出すこととなつた。(註8) かくて貨幣はなくても利子はあり、利子は貯蓄投資を均衡せしめる、というスローガンはここにその基礎をもつわけである。

(ii) 信用及び信用制度 以上のことから信用及び信用制度は彼によつて如何に理解されるかは程々推察されよう。彼が銀行券を紙幣と混同せることによつても明らかな如く、銀行券の信用貨幣としての役割を看過しこれを手形小切手と區別することにより、銀行券に基づく附加的信用を直ちに貨幣數量増加⇨通貨増發⇨インフレに直結し銀行券の發行は到る所で諸貨物の價格を高め、結局一般流通内に吸収されるとし(還流法則の無視)「銀行券の増加は資本を増加せしめることは出来ない、また吾々の輸出貨物・機械または原料を増加せしめえない。∴それは利潤を増加せしめることも利子を下落せしめることも出来ない」(論集 p. 88)として信用創造(この場合信用創造とは信用が資本を創造する、という意味での信用創造である)を否定し、かかる附加的信用のもたらす弊害について「貨幣または銀行券の數量が如何に豊富になつたとしても、またそれが諸貨物の名目價格を如何に騰貴せしめたとしても、またそれが從來と異なつた割合で生産資本を分配した(即ち強制貯蓄・小貯)としても……この場合には不自然なしかも不公正な財産の移轉が行われることになりしかも社會は何等の利益も得ないであろう」、(論集 p. 88)それのみかこのことは勤勉且儉約せる債權者を犠牲として怠惰且贅澤な債務者を富ませ、しかも國民資本の大部分を、

それを増進・改良する人々の手から奪つてそれを濫費且、破壊する人々の手に移すことになるとのべている。(論集 P. 281)

だがこのことからリカードが信用制度そのものの意義を抹殺し去ると思ふのは早計である。既述せる所より明らかなる如く、彼にあつては金生産は明らかにそれ自体としては意義なきものとして取扱われているのであり、それは『不可避免的』としてその眼に映じたのである。これは彼の資本視角そのものによつても規定される所である。けだし最大の利潤・蓄積(生産のための生産、蓄積のための蓄積)を追求する資本にとつて社会的には流通空費を形成し、總資本の利潤率にとつて「死重」(マルクス)をなす金生産に當てられた資本と労働を解放することは、即ち資本にとつて貨幣節約の機構を要求するに到ることは當然だからである。されば彼は銀行券||紙幣の唯一の効用が安値な貨幣をもつて高價なそれに代位せしめる点にあることを主張し、(論集 P. 282) 貨幣信用制度として國民經濟に關する限り、金・木札・銀行券等何れも差異なく唯數量のみが重要なのであるとのべると共に、小切手の使用による貨幣の節約をスマミスに做つて銀行の賢明なる操作と呼んだのである。だが同じく貨幣節約に資する銀行券と小切手とは彼においては同じく信用手段ではない。小切手は彼にとつては手形と共に流通手段ではなく、信用手段であり、かくて彼は學說史上初めて貨幣分具の分類において小切手と銀行券の區別をなしたのである。しかれば小切手流通の基礎を形造る預金銀行の當座預金の創設(手形割引)をリカードはいかに考えるか、彼は之に對しそれは公衆の預金に依つて爲されることをのべている。即ち彼にあつては銀行の割引業務と銀行券發行との間には何の關係も存在せず、(論集 P. 295) 銀行券の發券・創造と信用供與は同一機關によつて行わるべからざる二つの全く異なつた機能であり、ここに我々はビール條令における發行部・銀行部分離の理論的基礎を見出すのである。同時に彼

の信用乃至手形割引把握は明らかに信用媒介説——自然主義的信用理論(註9)——に他ならぬことも明らかである。そしてかかる誤謬自体がリカードの資本視角、貨幣視角に起因するものであることも亦明らかである。ただしP—P'の循環においては、まず生産物——商品が出來て後、貨幣形態を媒介として再投資される。擴大再生産の場合P—W—G—W—Pにおいては先ずG(貯蓄)が先行せねばならないのである。貯蓄されて後投資される。この点同じく數量說名目主義の立場に立ちつつも貨幣資本(乃至利子生み資本)循環視角に立つ論者(例えばケインズ)とは異なる。これらの論者では兩極が貨幣形態で現われる(G—G')故に投資が貯蓄を生む、或は投資が貯蓄と均等すると考えられるのであつて(註10)リカード的視角と逆になる。(註11)

(iii) 爲替相場 リカードは爲替相場について次の如くいっている。「各國の通貨が貴金屬からまたは隨時金と引換えられる紙幣から成立つてゐる限り、而してまた金屬通貨が磨損及び削取のために貶質してゐることがない限り、吾々は各國の鑄貨の品位量目を比較することによつて各國間の爲替平價(par of exchange)を確知することが出来る。」(論集 P. 50) 又「流通媒介物が貶質せざる鑄貨、またはかかる鑄貨と即時兌換されうる紙幣から成立つてゐる限り爲替は平價を中心として、貴金屬の輸送に伴う諸費用より以上にも、又以下にも變動する筈はない。しかし流通媒介物が減價紙幣から成立つてゐる場合には、爲替はその減價の程度に應じて、必然的に下落するであらう。それ故爲替は削り取られた鑄貨又は減價した紙幣から生ずる通貨の減價を判断すべき可成り正確な標準である。」(論集 P. 51—52) と。だが爲替相場變動の原因は何であるか、「リカードは一フロリンの銀は一フロリンの銀に等しいとのべたにすぎない」(C・リスト)そしてただ紙幣増發乃至鑄貨磨滅による國內物價騰貴と爲替相場下落とはメタルの表裏であることをのべたにすぎない。しかし、爲替相場は單なる貨幣數量の問題即ちリカードにおける

貨幣價值の問題としてのみ論じられるものでない。國際間における支拂差額（それ自体貿易のみならず資本移動の結果として現われる）の存在は外國爲替手形需給の不均衡を導き、この様な不均衡は信用制度下においては、爲替のもつ國際的支拂手段としての特性のために、支拂手段としての貨幣の機能に基く、債務請求權（爲替手形）の需給が商品需給に擬制され、ここに「對外債務請求權の價格」なる擬制が行われることなる。ここに需給により變動する爲替相場の本質がある。だから爲替相場それ自体は決して單なる兩替相場ではない。けだしこのことは外國爲替相場が銀行信用による對外商業信用の代位割引の過程において現われることよりして明らかである。リカードは單なる貨幣の段階に立つて、即ち流通手段に一面化した彼の理論の上に、より高次の範疇段階を内包する爲替相場の問題を解消したた數量のみをもつてそのすべてを一貫せんとしたのである。かくてこの視角からは貿易の逆調・金流出・爲替低落は常に相對的に過剰にして價值低き通貨のためであるとされるわけである。貨幣を流通手段に一面化し、より高次の即ち資本としての貨幣の規定も、利子生み資本としての貨幣の規定も總て一括して單純なる貨幣流通手段の段階に引下した彼の視角よりする實踐的決論は何か、次にそれを問題としよう。

註6 小畑譯ではここを騰貴すると譯しているが、明らかに誤りで原文では fall となつてゐる。(The Works and Correspondence of David Ricardo: P. Sraffa ed. 1951 Vol. III. P. 89) 註7 この利潤が資本の生産力によつて生ずると把握されると利子生産力説となる。ここから時差説（勞銀基金説的の生産性説）までは一步である。結局資金需給説も、生産力説、時差説も大同小異同じ系譜に屬する。

註8 通貨主義を更に完成せるオーバーストーン等においては、貨幣の價值と資本としての貨幣の價格（利子）を同一視する結果、貨幣數量の増減を利子率の騰落との關連において考察し、貨幣價值の上昇・下落を利子率の騰落に結合している。もつともこれに反對した當のリカードも一時的には銀行の附加信用が貨幣の過剰と利子の自然的水準よりの低下（實物利子と貨幣利子認識の崩壊）になることを認めている（論集 P. 33）が、これは

貨幣の段階で逆に資本を忘却して見たからであらう。ここに腰を据えたと万事は逆に利率政策によつてすべて解決されるという様に見えてくる。この点ソーントンも同じである。トワークはかかる見解を Money Market Theory と名付け鋭く通貨原理と共に批判している。古典派の傳統に立つマーンヤル、ホートリー、迂回生産理論の影響下に立つワイケセルによつてかかる利率操作による景氣政策(物價對策)の提出されたことは注目すべきである。註9 この派に屬するものとしては、ティール、ギルバート、シュルツゲバーニッツ、ラムベ、ハイエタ等もあげうる。註10 川合一郎「二つの信用理論—ケインズとハイエタ」社會科學25年2月號 p. 112 註11 同じくG・I・Gの視角に立つ場合もG・W・T・G(貨幣資本の循環)に立つ場合とG・I・G(利子生み資本の循環)に立つ場合では異なる。後者G・I・Gに立つ論者は古くはジョン・ロー、マクレオド近くはハイン、シユムペーター等であるが、彼等は信用は資本を創造する或は信用創造の無限擴張可能を主張する。だが前者G・I・Wの視角に立つ論者、例えばケインズにあつては少くとも商品流通をしたがつて背後にある生産を考え、真正インフレーション下においては價格上昇のみが存在する所以を認識するが、ジョン・ロー、ハインにおいては貨幣が貨幣を生むという利子生み資本の見地に立つためG・I・G循環の條件は忘れられ、インフレーション強制貯蓄の考えは入つてこないことになる。

三 通貨原理とその主体性

以上の如き理論構成よりの實踐的歸結それは通貨原理の主張であり、近代經濟學のいう古典派的均衡メカニズム論に他ならない。以下その歴史的背景・通貨原理の主張・及びその主体性に三別して論ずることにする。

(i) 歴史的背景 リカードの貨幣信用論が以上の構成を見た歴史的背景は次の如きものである。ナポレオン戦争後の英國における政府支出の増加、才入の不足、兌換銀行券の増加・爲替低落・金流出はそれに伴う英蘭銀行の正貨保有量の減少を結果し、遂に一七九七年五月の銀行制限條令(Banking Restriction Act)によつて兌換を停止したが同條令實施後、物價騰貴、紙幣價值下落、地金騰貴等の種々の影響が齎され、一八〇九年に入るや地金騰貴紙

幣價值下落は漸く顯著となつた。この現象の原因の追求、及び對策に關する關心は次第に高まり、この問題を探究するため一八一〇年には地金委員會が設置され、(すでにソートンは一八〇三年「紙券信用論」をもつてこれに答えている)その報告所謂地金報告を中心に一大論争が行われた。そして一部の意見はこの原因を専ら貨幣の側に求め英蘭銀行の兌換停止と紙幣増發に求める地金主義者、他方はその原因を當時の經濟狀態一般(主として穀物不足に基く物価騰貴入超増)に求め、それは金の價格が騰貴したのであつて銀行券は社會の需要をこえて増發し得ぬとする非地金主義者とに分れて論争が繰擡げられたのである。この論争は一八一九年の兌換再開條令において事實上、一應地金主義者の勝利に終るが、彼等の主張に反して兌換再開の實施(一八二二年)以後一八二四—二五年・一八三六年・一八三九年と引續き英國は恐慌の襲來をうけ英蘭銀行は屢々兌換停止を行うや、この恐慌防止策をめぐつて上記二つの議論はやや異つた視角の下に再現し、所謂通貨學派と銀行學派の論争となるのである。リカードの通貨信用理論は以上の様な歴史的背景の下に生れた。即ちナポレオン戦争下及び戦後の紙幣減價と商品價格騰貴の事實が彼の前にあつた。まさしくそれは彼の論理構造よりしても恰好の機にあつたといつてよいのである。(註12)、そして彼こそ最大の地金主義者に他ならなかつた。

(ii) 通貨原理の主張 先述せるリカードの貨幣信用論より導かれる通貨原理の結論は何か。

リカードは世界に於ける貴金屬配分を數量説的に把握し、貨幣の一國より他國への移動は貴金屬の過剰にあると考へた。即ち彼によれば各國にはその各々に相應した一定の貨幣的均衡狀態が常に見られるのであり、この均衡狀態においては貨幣金屬は各國において「同一價值」又は同一の「購買力」をもつのであつて、この場合には金は一國から他國へ移轉せられることなく諸國間の相對的狀態が何ら變化なしに繼續する限り、總ての取引は爲替手形

によつて決済される。即ち輸出入の均衡が存在するのであるが、流通通貨量が増加すればそれだけ物價は騰貴し、貨幣價値が下落し、かくて貨幣は「高物價」國より「低物價」國へ、商品購入の爲に流出し、その場合「低物價」國の貨幣量は増大し、その結果、兩國内における物價の平衡が再建され、同時に國際收支はバランスされるといふのである。（『地金の高き價格』論集 P. 88-91 『原書』第七章各所）換言せば貨幣の價値はその分量に依存し、同時にそれは金の流出入を通してそれ自身自動的に調節され、金貨が流通している限り物價の激變は未然に自動的に調節され經濟的擾亂は起らないと考へたのである。（所謂金本位ルール）ところが銀行券が兌換停止され、不換紙幣化するや即ち銀行券が金との連繫を喪失する場合にはその發行が金屬通貨の法則によつて調節されない。即ちリカードによれば銀行券發行が「要求次第正貨で支拂われている限り、正貨の輸出はその國にとつて有利である。なんととなれば銀行はかかる場合には銀行の存在しない場合に流通すべきだけの鑄貨の價値以上に銀行券を發行し得ないから。たとえ銀行がこの額以上に發行しようとしても、その超過分は直ちに銀行に復歸して正貨と兌換されるであろう。なんととなれば、その爲に我が通貨の價値が減少し、その輸出が有利となり、而してそれを我が國內に留めておくことは出来なくなるから。この方法こそ……我が通貨がよつてもつて諸外國と自動的に均衡を維持する方法である。」（論集 P. 88-91）が銀行が兌換停止されるや最早かかる基準を持たず、それは發行銀行の恣意に委ねられ、銀行券を引續き發行すれば、最初過剩なる通貨が正貨の輸出に及ぼした同じ刺戟が再び發生して前と同じ結果となり、金は流出し爲替は不利となる。しかも地金の輸出のみが合法的で鑄貨の輸出が違法である限り、金地金の價格はその造幣價格以上に騰貴するだろうといふのである。（註 13）だから金流出を防止し、物價騰貴を中和し、安定せしめ、均衡を回復するためには銀行券の發行量を金量に結びつけ金屬通貨の法則に従わしめる必要がある。かかる銀行券

發行量の統制・調節こそ物價安定の、國際均衡と同時に國內均衡に安定の爲の實際的對策であると主張したのである。完全なる紙幣流通が實施されない以上かかる處置のみが有効であると云うのである。だがかかる論理的歸結としての對策が彼の論理の一貫性を證明してもそれが謬見であることに變りはない。さればフライトンは通貨原理における退藏金（退藏貨幣）の作用無視と資本移動無視を批判したのである。（もつともフライトンは地金流出を資本の流出と同視しているが）けだし金の移動は必ずしも流通界からの鑄貨の引上流出に物價低落とはならず、その逆も同じ）又金流出の原因は必ずしも物價を媒介としてのみおこるものではないからである。それは史的事實に徴しても明らかである。ケインズはこれを「コラップス（崩壊）による調整」といつたが、コラップスによつても調整は不可能である。（例えば我國の金解禁（昭五）の效果を見よ）

(iii) その主体性（通貨原理の階級性） しかればかかる通貨原理の主体性階級性は如何。同時に一つの理論は直ちにある階級の代言人として現出するか、資本のもつ僞贖性とパラドックスは如何なる茶番を理論に強いるだろうか今やそれが問題である。既述せる如くリカードの体系は優れて生産的な体系として、英國産業資本の騎士としてミスと共に語られている。このことは彼のもつ資本視角そのものからみても明らかであろう。地金論争に當つて非地金主義を主張する貸付資本の代表たる英蘭銀行理事者團に對立した彼の主張は正しくそのことを物語つている。だが通貨を金に直結して統制し、よつて資本蓄積を推進し、社會的浪費を排除せんとする彼の主張は逆に貨幣を重視する結論を導出するといふパラドックスを演じ、通貨數量の直接的統制に基づき貸付資本家の勢力擴大、利子率騰貴の合理化に奉仕せしめられる基盤をもつてゐる。マルクスは正しくこのことを指摘し次の如くのべてゐる。「貨幣を流通手段としてのその流動的形態において孤立せしめたリカードの理論が結局において、モネタール・シス

テムの迷信家たちの夢想だにしなかつた絶對的影響を貴金屬の増減がブルジョア經濟に及ぼすことを主張するに至つた。」(經濟學批判 P. 246) 云々。

けだしリカード理論の基盤の上に作り上げられた通貨學派の主張こそ、ピール條令に結實する英蘭銀行理事者團の主張に他ならず、かつて英蘭銀行理事者團によつて主張された非地金主義の見解はピール條令をめぐる論争においては銀行學派によつて地方銀行・産業資本の立場を代表するものとして主張されるのである。だから資本視角そのものからその理論が特定の階級の立場を代言するものとして一面的に把握することは出來ず、又特定の階級の利益を代表することが直ちにその理論構造を規定するものと考えることは早計を免れぬ。(だがこのことは理論の持つ階級性を否定することでは決してない) けだし、生産資本循環の視角に立つリカードがその局面に應じて産業資本の、時に貸付資本の代言人として踊るのである。体制的危機の存在する金融獨占資本主義の現段階においては銀行(貸付資本の代表)資本と産業資本の癒着の完成は資本の政策をその一方に偏して指向する如きことなく、金融獨占資本の利益にマッチする政策体系を景氣の諸局面においてとらしめることになる。この場合には資本は或はAの、或はBの理論を局面に應じてとることにならう。(註14)

註12 當時の史實については、アンドレアデス「英蘭銀行史論」町田譯參照。尚フライントンもリカードの誤謬の大なる原因が、當時の歴史的背景にあることを指摘している「通貨論」福田譯 P. 109

註13 リカードはかかる混合通貨の場合、紙幣のみ

も金貨と銀行券の流通が在存する場合しかも銀行券が發行銀行の恣意に委ねられている場合の流出の原因を論じ、紙幣のみから成立つている場合には金流出は生じないことをのべている。(論集 P. 48) 註14 例えば戦後の預金封鎖・軍事補償

打切後のインフレ・復金インフレは、明らかに企業の再建、それによる銀行債務の辨濟を指向する金融資本の主導下に行われた。それが終るところはインフレ收束・ドツヂライン・デイズインフレ政策で、蓄積と集中を推進した。前者の場合には曲解されたケインズ理論が後者の場合には古典派的理論が夫々採用された事實を見よ。だがかかる療育にも拘らず、我國通貨統制において絶えず内在する日銀・安本の對立も亦注目されるべきである。例えばインフレ收束をめぐる安定通貨論と中間安定論の對立のごとき。

四 展望と結び

(i) 理論史的展望　序論においてのべた如くリカード的視角そのものは死滅していない。生産資本循環視角が資本の排他的視角であるにせよそれは資本制生産の基礎に着目せるものとしての内容をもつ限り、それは絶えず擴大され再現する。それは貸付けうべき貨幣資本の蓄積が過重となる時期においてはではなく、貨幣資本の蓄積が直ちに現實資本に轉化する身揚期、或は巨大なる浪費の現われる戦時において（けだし今次大戦中古典派への復歸が叫ばれた事實を見よ）或は戦争による生産力の荒廢期乃至それよりの回復期において復活し潤歩するのである。例えば英國における第一次大戦後の金本位復歸をめぐる論争におけるケインズに對立せる健全通貨學派の代表ロビンス。或は同じくケインズに對立せる中立貨幣論におけるハイエックの所説を見よ。彼等は共に生産財生産部門を起点とする景氣循環を貨幣・信用の供給量増大を通じて説明せんとし、不況の發生をかかる追加信用・迂回生産の延長・インフレ・強制貯蓄の視角において導出するのは明らかに近代リカード版の再現に他ならず、かくてハイエックの政策的歸結中立貨幣論も亦彼が資本制生産の特質をボエームにならつて迂回生産に求め、それに貨幣を從屬的なもの

として導入する P—P 循環視角からの歸結であり、貨幣が財貨側の均衡に對し擾亂作用を波及せぬ如く信用—通貨量を一定にすることを主張する彼の言はまさにリカード的視角に一致する。同じくウィーン學派・ミーゼスも亦その有名な「貨幣及び流通手段」において貨幣の本質を一般的交換手段に求め、紙幣と銀行券の區別を認めず、リカードと同じく銀行券還流の法則を無視し、後にハイエクに展開される追加信用—インフレ—恐慌の見解を指摘している。更に又「一〇〇%貨幣」—則ちこの主張は一覽拂預金は同額の「政府紙幣」を以つて保證されるべきであり、且つ銀行はこの貨幣（政府紙幣）を貸付けてはならぬとする—における I—フィッシャーの提案は、リストも指摘する如くりカードと通貨主義の要求するのと正に同一のものであり、ただこの場合リカードの提案を一言一言、但し小切手について繰返したものにすぎぬ。（註15）又 G・カッセルの所論も亦同じくりカード及び地金委員會の理論の反復にすぎぬ。則ち彼によれば爲替相場は結局購買力平價によつてきまる。しからは購買力は何によつてきまるか、物價水準によつて、物價水準は貨幣數量によつてきまるといふのである。この点ミーゼスも同じ。だから以上の様な理論からは貨幣數量の安定（統制）は物價水準の安定に直結し、景氣變動に對する根本的對策として同時に國際收支の均衡を齎すものとして主張されることになる。まさに通貨原理の再版に他ならぬ。そしてかかる古典派的均衡メカニズムこそメッターもいえる如く「一般理論」の出現まで學界を支配していたのである。（註16）だがケインズ革命の嵐に抗して古典的視角は再び立上る。今次大戰後における國際通貨基金の「根本的不均衡」なる語の解釋から生じた「ドル不足」論争—「國際收支均衡メカニズム」に關する論争におけるハーバラーの所論は明らかに古典的傳統に基づきかかる不均衡ドル不足の原因を基本的に、インフレに求め、インフレを停止し通貨を再評價すればドル不足は解消するとし、自らドル不足について古典的インフレ理論（—通貨原理）が本質的に正しい

ことをのべている。(註17)そして、この様な彼の論理的歸結そのものが同じくウィーン學派に發した彼の資本視
角にその原因をもつものではないだろうか。

(ii) 結び ドッチ・ラインは既に屢々論じられた如く、財政の均衡化をはかり、インフレの根因をたち切ると
共に單一爲替レートを設定し、これを安定基準として維持するという内容をもち、基本的には古典派的リカード
的貨幣安定策 \parallel デフレ政策に他ならず、ただそれはかつての第一次大戦後における各國の金本位制への復歸が直接
金に結びついた内容をもつに對し、國際的流動性(世界通貨)としての役割を荷うに足るドル(それは相對的に金に結
びついているが)に結びついている点にのみ相異がある。けれども、第一次大戦後の貨幣的安定が決して絶對的安定
でありえず、二九年の世界大恐慌と三一年の英國金本位再停止に始まる三〇年代の金本位制の崩壞、爲替引下げ競
争、爲替管理制の實施、ブロック經濟化等々に表現される動搖と混乱にとつて代られ、金本位制の復歸 \parallel 貨幣的安
定が一時的「相對的安定」にすぎなかつたと同様に、そして更に古くは通貨原理の實踐が恐慌を激化したと同じく
、ドッチ・ラインも亦同じ運命を辿らねばならぬことも亦衆知に屬する。さればこそドッチ・ラインはかかる古典
的側面をもつと共に現實的には「コラップスによる調整」を避けんとする國內資本の要求によつて自己を歪めてい
る。(デイス・インフレ政策)一方「コラップスによる調整」を避けんとする資本主義の希望はブレトンウヅ協定の
成立に基く、國際通貨基金・國際開發銀行の設置・國際貿易憲章の提案等に儻なき希望をよせたのであるが、彼等
も亦その悲願の如何に困難なるかを認めざるをえない。(註18)

だが今はそれが問題ではない、今はただ國際均衡と國內安定を實現することが單なる貨幣的メカニズム \parallel 貨幣的
安定に依つて齎されえないことが經濟學の一般的通念とされている時においても依然それが主張される論理と

その實踐を指向される現實の論理を指摘するに留めよう。同時に如何にそれが主張され實踐を指向されようとも最早昔日の如くそれが則目的に實施されず、又世界的公民權を主張しえぬことは第二次大戰後の世界資本主義の不均等激化が貨幣的安定のみに安易な希望を託しえないきびしき現實に直面していることを物語るものである。

註15 C・リスト貨幣信用學說史天沼譯 P. 24

註16 エリス編「現代經濟學の展望」邦訳I卷 P. 83

註17 小島清

「ドル不足の問題点」世界經濟昭24年9月號 P. 6—10

註18 前掲「現代經濟學の展望」P. 81—82

(一九五二・二・一三)

(追記) 本稿は本年(昭27)2月作成された。論叢掲載に當つて紙面の都合と半分に壓縮したため説明不足を免れなかつたことを附記しておく。(十月四日)